

立焼跡

焼跡に立つ 陽韻

欲掃胡塵萬里航  
敗殘憔悴復家郷  
堪看瓦礫錦城屹  
落照蕭條我影長

胡塵を掃はんと欲して 萬里航す  
敗殘 憔悴して 家郷にかへる  
看るに堪へたり 瓦礫 錦城そばだつを  
落照 蕭條として 我が影長し

語注

胡塵 異民族襲撃の際の塵煙、轉じて異民族との戦鬪  
錦城 大阪城 落照 夕日 蕭條 もの寂しきさま

「家無かるべし」の聲を背に、再び逢ふことあるまじと思ひつても手を振りて別れを告げぬ。ホームに立てば一面焼野原にて、大阪城天守閣のかくも近かりしかと驚く程の距離に見え、阪急百貨店の昔のままの外壁を見せるしと、便所を利用せしこと多かりし共同火災ビルが目に着きしのみ。

我が家一帯は悉く焼け、何れの邊になるか見當さへつかざりき。「疎開先は何處」の立札も無かりしが、近くの親戚の一郭の焼けざりしを見ぬ。そを訪ねて三月に空襲に遭ひ、高槻に移りしと教はりぬ。夕食に與りし後、これまでは「星と碇」なりしも、今は財産税にて頭の痛きが故に稅務署に勤務するやう慫慂されぬ。

高槻の知人を訪ぬれば近くなりと案内されぬ。表戸を開けて「兄貴歸りぬ」と聲掛けしに迎へに出づる者なし。奥に坐せしままらしき阿母の「ラジオの操部隊の博多上陸を傳へをりしかば、今日くらゐ歸來すべう思ひをりぬ」てふ氣樂なる聲しぬ。此方は死ぬほどの目に遭ひるしに、無事に歸らんと確信し切りし口振なりき。岸壁の母に倣へとは言はざるも、昭和萬葉集にある

もろ手もてあくる格子戸かるくあき 我は歸れり母待てる家に  
の心情なりせば、阿母もまた、次の歌の如くいそいと玄關に立出でて  
顔をば見せまほしかりしが。

たそがれの庭にまさしく子は立てり うつそみ生きてあな還りきつ  
改めて歸還の挨拶をせしやは記憶せず。奥の間に背囊より土産をば  
取出しぬ。米、罐詰にはさほど關心を示さざりし阿母が砂糖を見て笑顔  
になりぬ。少量を掬ひて舐めるしが、余の歸還より砂糖の手に入りしが  
嬉しかりしならんか。